**研究発表要旨**

**マードックにおける妊娠中絶問題
― *The Book and the Brotherhood* を中心として ―**

**片山　亜紀**

　アメリカほど極端ではないが、イギリスにも妊娠中絶をめぐるプロライフとプロチョイスの対立がある。A.N.ウィルソンの回想録によると、マードックはプロチョイスの女性に向かって中絶後の後悔を強調するというように、プロチョイスの主張に距離を置いていたという。初期小説にこのスタンスはかなり忠実に再現されている。*The Severed Head* (1961), *A Fairly Honourable Defeat* (1970), *The Black Prince* (1973) には、それぞれ中絶をする女性が登場し、みなが子どもについて何かしらの屈託を抱えている。しかもそのことをうまく口にできないまま自殺を試みたり、あるいはせっかく打ち明ける相手を見つけても死なれてしまったりと不幸な目に遭う。ところが後期の*The Book and the Brotherhood* (1987) になると、中絶の表象はかなり違ってくる。

　この後期小説は、まずはブラザーフッドが書物の完成を待つという話である。書物を書いているのは唯物論者のクリモンド、ブラザーフッドはそのクリモンドの私的な支援グループで、男女５人（ジェラード、ジェンキン、ダンカン、ローズ、ジーン）を中心メンバーとしている。彼らは大学時代の友人たちだが、書物の完成を待つうちにすでに数十年が経過し、50代に差し掛かろうとしている。おまけにクリモンドはジーンを誘惑してさらっていく。夫のダンカンは一人残されて悲嘆に暮れる。人々は夫婦をどうにか元の鞘に納めたいと考え、テイマーという20歳そこそこの若い女性に取り持ち役を期待する。しかしテイマーはダンカンを好きになり、思いがけない妊娠に驚き、あわてて中絶する。子どもを中絶したテイマーは、今度は激しい後悔に襲われる。

　テイマーが中絶を行い、そのあとの葛藤に苦しむところを見ていくと、それまでのマードックの小説にはなかった特徴がふたつ浮かび上がってくる。ひとつは中絶がさまざまな人間関係のなかに位置づけられていることである。それらの関係のなかではパワーが蠢いていて、そのパワーの向きはめまぐるしくシフトする。たとえば子どもとの関係ひとつを取ってみても、これまでの小説では女性が一方的に無力な子どもへの慚愧の念に囚われていたのに対し、テイマーは子どもからの反撃にも脅えなくてはならない。

　もうひとつの特徴は、中絶をした女性が孤独のなかに置き去りにされるのではなく、ともに回復への道を模索する、第三者を見つけることである。国教会の牧師ファーザー・マカリスターは、たとえば人気のない教会を使ってテイマーのために喪の儀式を執り行うなど、かなり異端の行為にまで手を染めて彼女の回復に心を砕く。ここには彼の宗教者としての姿勢が伺える。彼にとってのキリスト教の本質は、どこにでもいる人間キリストが磔になったという事実にあるのだが、その「個別性と経験的なディテール」こそ、彼が悩める人に寄り添うときにも大切にするものである。

　このように中絶の表象の特徴を取り上げて行くと、中絶をめぐる物語は、書物の完成を待つという話のなかのたんなる小エピソードというよりは、もっと重要な機能をもっていることが分かる。クリモンドが最終的に完成させる書物は「過去の文明を、現在そして未来と関連づけて、その全体像を眺める試み」であることから、そこで語られているのは世界全体をひとつの理論で説明しようとする「大きな物語」である。これに対して中絶の物語はいかにもあてどなく、パワーも流動的で、日常的・偶発的・個別的・経験的な次元に焦点が当てられていて、「大きな物語」に対するカウンター・ストーリーと捉えることができる。

　後期のマードックにおいても、プロチョイスには明らかに距離があるが、中絶は肯定もされない代わりに否定もされない。牧師とテイマーの共同作業から分かるのは、中絶が真剣に取り組まれるべき大きな問題とみなされていることである。最終的にマードックは、プロチョイスでもなければプロライフでもない、どちらの権利の主張にもすっきり収まることのない、個々人の葛藤にこそ希望があると示唆したのである。